相馬御風（そうまぎょふう）と早稲田大学校歌

早稲田大学校歌　作詞　相馬御風　作曲　東儀鉄笛

一
都の西北　早稲田の森に
聳ゆる甍は　われらが母校
われらが日ごろの　抱負を知るや
進取の精神　学の独立
現世を忘れぬ　久遠の理想
かがやくわれらが　行手を見よや

二
東西古今の　文化のうしほ
一つに渦巻く　大島国の
大なる使命を　担ひて立てる
われらが行手は　窮り知らず
やがても久遠の　理想の影は
あまねく天下に　輝き布かん

三
あれ見よかしこの　常磐の森は
心のふるさと　われらが母校
集り散じて　人は変れど
仰ぐは同じき　理想の光
いざ声そろへて　空もとどろに
われらが母校の　名をばたたへん

わせだ　わせだ　わせだ
わせだ　わせだ　わせだ

24歳で作詞！

◆相馬御風（一八八三～一九五〇）

本名昌治。新潟県糸魚川市出身。早稲田大学卒。明治から昭和にかけて歌人、詩人、自然主義文学評論家、作詞家、郷土研究家、さらに良寛研究の第一人者として活躍。

近代文学黎明期における口語自由詩の提唱、早稲田大学校歌「都の西北」、日本初の流行歌「カチューシャの唄」、童謡「春よ来い」の作詞、良寛研究・顕彰黎明期における最大の功労者として有名。

華々しい東京での生活をなげうち、大正五（一九一六）年、内面告白の書『還元録』を出版し、糸魚川に帰住した。

早大校歌碑は校歌制定九十年にあたる平成九（一九九七）年に建立。

碑石には御風の出生地である新潟県糸魚川市姫川の銘石を使用している。大学正門近くの木蔭のなかにあり、御風直筆の歌詞が刻まれている。

◆「都の西北」完成までのながれ

♪明治四〇（一九〇七）年大学創立二十五周年を間近に控え、校歌を作成する機運がおこる。

♪全学生に歌詞を懸賞募集したが快心作なし。

♪審査員の坪内逍遥、島村抱月が、当時早大を卒業して二年、「早稲田文学」の編集に携わっていた御風に作詞を依頼。作曲は雅楽家の東儀鉄笛に依頼。

♪当時、国内に校歌という概念はないに等しく、東儀と綿密に打ち合わせ、英米の大学校歌も調査。

♪「都の西北」「心のふるさと」あたりがまず頭に浮かぶ。

♪歌詞の輪郭を描き、高田早苗学長、坪内、島村に相談。

♪没頭すること十日で書きあげた。（半月や一か月とする記述もある。）

♪坪内に校閲依頼、わせだのコールが入る。（御風原稿ではもともと三回あり、坪内が四回加えたとする記述もある。）

♪十月二〇日、式典の日の発表当日、陸軍軍楽隊の演奏。初代大隈重信像前の広場で発表。この際、御風は感極まり涙したという。

◆相馬御風随筆　校歌「都の西北」と私

「野を歩む者」第34号（昭和10・7発行）所収
※歴史的仮名遣いを改めるなど、読みやすく編集。

（前略）早稲田の校歌「都の西北」は、たしかに私が二十五歳（※1）の時に作った歌である。しかし今日ではそれが自身の作った歌であるというようなつかしみを超えて、私を興奮させる。そして不思議な力で私に母校思慕の熱情を湧き立たせる。

時に私も声をあげてあの歌をうたう。しかしそのような場合でも私にはそれが自分の作であるというような意識は起こらない。おもうにあの校歌は作者たる私如き一小存在から遠く去って、いつしか早稲田学園という大存在に同化されてしまっているのであろう。随ってもう今日では作者名などは抹消されてもいいほどにあの校歌は早稲田学園のものになっていると私は思っている。

うたわれる歌は歌詞そのものよりも、それをうたう人々の意気と熱情如何によって生かされもし、また殺されもする。いかに立派な歌詞でもうたう人々に熱情なくんば断じてそれは躍動しない。この意味で早稲田の校歌を今日の如くいきいきしたものとし、権威あるものとしたのは、作歌者たる私の力であるよりも、それを高唱し〳〵〳〵して止まない校友学生諸君の意気と熱情である。又「都の西北」の歌が全国津々浦々の児童にまでもよろこびうたわれるようになったことも、それは早稲田学園の精神力が全国に浸潤した結果であるといわねばなるまい。それは現に作者である私でさえもあれを聞きあれを歌う時、自分がその作者であるなどというような意識から全然離れて、ひたすら母校への思慕と賛美とに燃えているのでもわかる。

今年五月二十六日にも私はラヂオを通して野球リーグ戦の早立二回戦の状況を聞いていたが、戦い終わって統制ある「都の西北」の合唱されるのを聞いた時、私の眼がおのずからうるむを覚えた。そして私もまた低音ながら百里のこなたからその合唱に和せずにいられなかった。あの歌を私が作った頃、私は目白台の雑司ヶ谷町百十九番地の小さな家に住んでいた。そしてあの歌を作る為に私はそこから幾十度大久保余丁町の坪内先生のお宅と牛込薬王寺前の島村先生のお宅と、そして戸塚の東儀鉄笛氏のお宅へ歩みを運んだことであろう。光栄と感激とに燃えながらも、私はどんなにあの歌の為に苦しんだことであったろう。あの頃のそうした憶い出も私を涙ぐまさずに措かない。

しかも今や坪内先生も、島村先生も、また東儀さんもこの世の人ではない。「都の西北」を私に作らせる為に苦心してくださった方の三人が三人とも既にこの世の人ではなく、私ただ一人が現世に残ってそれを聞いている。私はラヂオで早稲田数千の健児諸君の合唱の声を聞きながらも、その事を思って更に別趣の感傷に撲たれたのであった。

それから又私はあの歌を聞いたりうたったりすると、それを作った頃のことよりも、あの歌を学生諸君と共に自分も声高らかにうたった頃の若かった私自身がおもい出され、その頃の生活を懐かしく思うことがよくある。これはおそらく私ばかりでなく、多くの校友諸君の経験されつつあることであろう。あの歌は母校への思慕と賛美の情をそそると同時に、若かった自分への愛惜を感じさせる。

（中略）まだ我国に範とすべき校歌らしい校歌の出ていなかった事とて、あれだけの形式をきめてかかるにも作曲家の東儀さんと共にかなり苦心した。荘重雄渾を旨とせよとの高田学長はじめ諸先生からの仰せつけがあった為、その点で第一に調子をきめるに非常に頭を悩ませた。八七という調子はともするとうわつき易い調子である。それをさせずに言葉の選択をして行くのがずいぶん苦労であった。

しかしあの校歌をして荘重にして雄渾、爽快にして明朗たらしめたのは、何よりも東儀さんの作曲のおかげである。あの歌は全く曲によって生かされ、しかも予想以上の品位と迫力とを得たのであった。校歌「都の西北」は名歌でないかも知れないが、名曲である点では我国稀有の作品であろう。

校歌「都の西北」はまた私にとっては校歌の処女作であった。爾来今日に至るまでに私は百数十篇の校歌団歌を作ったが処女作としての「都の西北」がやはり一番なつかしい。私は大学リーグ戦の野球試合の放送を聞くのを年中で最も楽しいことの一つにしている。それも早稲田の出ない時は多く聞かない。野球が好きなのか早稲田が好きなのかわからない。或いは若き血に燃ゆら早稲田の学徒が高唱する「都の西北」を聞くのが好きなのかも知れない。春の試合の相手は後もう慶応とだけである。フレーフレーワセダを連呼せざるを得ない。

これはかなり以前のことだが、当時総長であった高田先生が新潟県においでになった折に「相馬君どうだ一つ校歌祭でもやることにして、その機会に久しぶりで上京しないか」というようなことをいっていただいたが、つい私はその後一度も東京の土を踏まないで辺土にくすぶっている。そして早稲田学園にまみえざることも既に二十年になる。

しかし母校への私の思慕は常に若々しい。（五月廿七日）

※1　数え年。満年齢では（七月十日の誕生日後なら）二十四歳、または、（誕生日前なら）二十三歳。